

冬の終わりから春先にかけて、鹿が人家の小便壺についた。鳳来寺山麓の門谷などでも、以前は夜遅く用足しに出ると、二つ三つ揃って、暗がりへこそこそ影を消す姿を見ることは決して珍しくなかった。山犬などもそうであるが、鹿はことにこの時期に塩分の不足を感じたのである。山中などでも、人が用足した後を索めて遠くから集まって来ると言う。

狩人がハネワと言う罾で、鹿を捕ったのはその時期であった。ハネワはすなわち跳輪で焼畑近くなどの、だいたい鹿の寄りそうな地を選んで設けたのである。その方法は、まず鹿を吊るし上げるに十分な立木を基にして、その前にゴ(落葉)を



堆く掻き集め、落葉の繞りに枯枝の類で柵を作って囲った。而して一方口を明けておいて、そこに跳輪を仕掛けたのである。最初に選んだ立木を曲げて来て、それに藤縄で輪をこしらえて罾の口に置いて、一方別の藤縄をバネ仕掛けにして、曲木を押えて置いたのである。すなわち囲いの中の落葉へ小便をして置く。鹿が来て中の落葉を舐めようと頸を差し出すと、バネに触れて外れて、曲木がもとに跳ね返る勢いで、藤縄の輪で頸を括り上げるのである。何だか説明がややこしくなったが、要するに小便を舐めにかかる鹿の頸を、曲木の跳ねる力で括り上げるのである。

一人がハネワで鹿を捕ると、われもわれもとその傍へ仕掛けたそうである。一ヶ所に同じような罾が、三つ四つぐらい並ぶことは珍しくなかったと言う。しかし後から真似たものへは不思議にかからなんだ。三つ四つも並んだ中で、同じ罾にばかり、三日も続けて掛かったことがあったと言う。不思議ことに、ハネワに掛かったのは雌鹿ばかりで、雄鹿はかつて掛からぬと言うた。あるいは雄鹿だと角が邪魔になって、うまく輪が頸に掛からぬかとも思うが、狩人の一人はそうは言わなんだ。雌鹿のことに子持ち鹿が小便を好いて掛かると言うのである。して見れば人の尿についたのは、ひとり伝説の雌鹿ばかりではなか

った。

また狩人の話では、その頃の鹿は朝、枯草においた霜を舐めていると言う。



ヤトウ

鹿を捕る方法には、ハネワのほかにヤトウがあった。ヤトウのことはすでに猪の話に説明した通りである。それを焼畑などのワチの陰において、中に飛び入る鹿を捕ったのである。夏分蕎麦の種へ菜種を混ぜて播くと、蕎麦を刈り取った後に、青々と伸びていた。山が冬枯れるに従って、鹿がついたのである。高く結ったワチに前肢をかけて、中へ飛び越すとそこにヤトウの尖が鋭く光っていた。朝早く見回りに行くと胸や腹を深く貫かれて、死んでいる鹿を見出すことは珍しくなかった。一冬にひとつ畑で、七つも捕ったなどと、名もないへボクタ狩人の、手柄話の種にもなったのである。